

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電二九三五・六（公衆）〇四七二（二二）七二〇七）

「四月一日」を断固として迎え撃て！

いよいよわれわれは、目前に迫った「四月一日」を、敵の目論見を粉碎して勝利的に迎えようとしている。しかし、この「新会社」なるものが全く「ウソ」と「ベテン」に塗り固められ、労働者に対しては「差別・選別」「強労働」が強いられるという、まさに「地獄の会社」だということがあらためて明らかになってきた。今一度このことをしっかりと確認し、闘う動労総連合の強化・拡大を勝ち取り、「分割・民営化」粉碎まで断固闘いぬこう。

能力主義導入で

労働者を差別・分断

新会社における労働条件の低下で最大のものが、今までの年功型の賃金体系から試験制度を導入した能力主義型賃金体系になるということだ。これは職場に競争を持ちこみ、労働者間の団結を破壊し分断しようとするものだ。

主なものを挙げてみると、九つに等級が分けられ、上位への移行は試験で行う。昇給についても、欠勤・処分・勤務成績などのカットについての制限がとりはられる。

労働時間も大幅に弾力化され、現在の最大拘束一日十三時間から十七時間へと延長されようとしている。また職制も現在三四機関三七種の職名が、一四機関一四四種になり職名での業務内容の拡大、多能工化がはかられている。

さらに、経営上の都合による待命休職、本人の意志を無視した一方的な出向命令、はては退職金算定の基礎から定昇・ペアの三割を引いた分だけを払うというのだ。

こんな労働条件のもとでどうして安全が保てるというのか。まさに労働運動をつぶすためにのみ導入された労働条件だ。

新会社の役員に

警察官僚が入る

経営陣の顔ぶれを見ても、近畿管区警察局長・柴田なる警察官僚が東日本の監査役に、また「動労千葉を全員クビにし

ろ」と叫んだ住田が社長の座についた。

そして革マル松崎―鉄道労連の存在。この陣形を見ただけで「新会社」の中身がわかるというものだ。

革マル松崎は言う。「三〇%の営業外収入を得る」「二〇%や三〇%の賃下げも必要」と。つまり、これがイヤならやめろということなのだ。そして運転以外の職場での徹底した合理化を進める。車掌の廃止や検修、保線の下請化などであると五万人位の労働者の首を切ろうというのだ。まさに「地獄の新会社」に入っただの。

これを進めるために動労千葉、国労に対する攻撃が激しくなることは明らかだが、しかし、これに勝ちぬくためには、動労千葉が闘ってきた方針で立ち向う以外にないことも明らかだ。

中江選挙闘争勝利に全力で決起し、動労総連合の強化・拡大をかちとり動労革マル―鉄道労連を解体・一掃しよう。

国鉄で
新労使対決

警備警察のスター柴田氏
鬼の動労松崎委員長



柴田善基氏



松崎委員長

警備警察のスターと鬼の動労委員長が鉢合わせ。十八日付で近畿管区警察局長を退任する柴田善基氏が、国鉄分割・民営化後の東日本旅客鉄道会社の監査役に就任する。これが四月一日に内定した。柴田氏は警備庁公安三課長、警備庁公安部長、警備庁警備部長などとして、警備を担ってきた。新会社は、この二人を労使の立場で抱え込むことになる。

新会社でも続く警察―革マル連合！

地獄の新会社を粉碎せよ